

月刊誌が、おそくもその月央までにだせないということは、情けないことである。本号も8月中に出るか出ないかのすれすれであろうが、それでも漸くこの号をもって、ここ数カ月のおくれをとりもどしたことになるようである。この間、読者にはずいぶんど迷惑をおかけしたことを思う。

吉田主幹が、日本病院管理学会の欧米病院視察旅行に出張中なので、7月の編集会議で、私がこの欄のピンチヒッターに指名された。私としては初めての編集後記であるが、どうも大変な仕事であることを痛感した。第一にゲラ刷りで、全部の原稿が、手許にとどいたのが8月12日で、15日までに書き上げて欲しいという医学書院の注文である。全原稿を、確実に通読しなければならぬのだ。

私も編集員の一人であるが、不勉強で恐れ入る次第だが、大体この本は、全体として固いものばかりであるから、ねころがって気軽に目を通すとか、往復の電車の中でとかいうわけにはまいらぬ。したがって、毎号細かく目を通したことは、あまりない。

今回はそうはいかないので、气象台始まって以来の熱気であると新聞が報じた8月13日日曜日の昼下り、37.4℃の暑気と斗いながら、流れる汗をぬぐって、はるかに吉田主幹ら旅行中の仲間をうらやみながら、全原稿に目を通した次第である。

本号の編集会議が行なわれたとき、この特集を提案したのは、多分、石原氏であったと記憶している

が、吉田主幹も、そのほか何名かの同人たちも、病院の廃棄物自体重要であることを理解しながらもあまり興味を感じなかった。私もその一人であった。くさい号だなと誰かが言ったのをおぼえている。

しかし、全稿に目を通して感じたことは、病院は、一般企業に比して使用物品の種類と量は膨大なものである。アイソトープのような取扱い上危険なものも多い。これに伴って使用後、廃棄するものも極めて多量である。しかも病院アクティビティが増大すればするほどこの量はおびただしく増えるものである。処理の方法によっては危険なものもある。これは病院にとって比重の高い問題点であるにもかかわらず、この問題は未熟のまま放置して、計画的、系統的対策はいっこうに行なわれていなかった。本号いずれの論文もよくここまで掘り下げたものである。

石原信吾氏は序説において、病院の廃棄物の問題と分野を、人体と廃棄物を例証して、まず明快に理論を展開し、廃棄物を有価廃棄・無価廃棄物、焼却可能廃棄物・焼却不能廃棄物、および放流可能廃棄物・放流不能廃棄物と、病院の廃棄物に興味ある新しい分類を提起した。

有価廃棄物では、その額は多くないとしても、「病院の上のほうでは気のつかないうちにその廃棄物の出る部課あるいは、それを扱う部課ですでに、有価処分をしてその収入を勝手に使っている」と勇気をもって発言している。焼却廃棄物と放流廃棄物については、高性能の設備の必

要性を説いている。

早川かつ氏は、小川健比子氏の「病院建築」から、病院が排出する塵芥の総量が、灰炉を除いて一人一日数ポンドになること、このうち食物廃棄物は1/2—3/4ポンドあり、一人一日に焼却処理すべき残飯その他の焼却物は、0.8kgあることを引用して、大阪日赤病院が行なっている廃棄物処理の実態を述べた。病棟で特に増加した廃棄物をあげて、数年前に比して倍の増加を示したという数字も興味がある。

平野栄次氏の有価廃棄物の分類と、処分先からみた有価廃棄物、および処分方法についての論文は、病院管理者に、よき教唆を与えるであろう。

鬼沢文男氏の自家製焼却炉の考案も廃棄物処理に実際に困っている病院の苦悩を示しているし、上林三郎氏は動物性廃棄物の処分に関連ある法則を列挙して、われわれがうっかりしていた側面を解明してくれている。伊藤誠氏のダストシュート、福沢、後藤氏の焼却炉とディスポーザー、三浦大助氏の浄化そうとコミュニティプラントはいずれも専門家がまともにとりくんだ廃棄物処理方法として、病院側に、豊かな資料を提供している。

これらの論文はいずれも、病院の廃棄物という未開発の問題に価値ある示唆を提供した。さらに病院にはこのようにいまだ手のつけてない未開の分野が、数多く残されていることを暗示している。